

JISS

Winter 2006



【特集】
第15回アジア競技大会
ドーハ2006
を振り返る

Doha 2006 Medal Table 1 <All Sports>						
Rank	NOC	G	S	B	Total	Rank by Total
1	CHN	165	88	63	316	1
2	KOR	58	53	82	193	3
3	JPN	50	71	77	198	2

Doha 2006 Medal Table 2 <Beijing 2008 Olympic Events Only>						
Rank	NOC	G	S	B	Total	Rank by Total
1	CHN	119	74	46	239	1
2	KOR	44	32	56	132	3
3	JPN	39	48	65	152	2

Tbl.1

でのドーハはどうであったのか。我々はその評価も併せて行なう必要がある。

今大会での明るい話題としては、北京大会での活躍が期待される若手選手の好調があった。競泳男子200m背泳ぎでは、入江陵介（16歳・近畿大附属高校）が1分58秒85の高校新記録で優勝。矢野友理江（18歳・大成学院大高校）は200mバタフライと800m自由形の両方で優勝し、「競泳女子で最も過酷と言われるこの2種目を制したのは大会史上初めて」と大々的に報じられた。またフェンシングでは、男子フルール個人決勝で太田雄貴（21歳・同志社大）が28年ぶりに金メダルを獲得した。準決勝で2005年世界選手権大会2位の張亮亮（中国）を破っての優勝だった。

だが日本には解決しなければならない課題もある。日本が目標達成に向けて Team Japanとして苦しい戦いを強いられた原因の一つに、柔道での金メダルの取りこぼしがある。全階級でメダルを獲得しながらも、3個の金メダルを決勝戦で失った。釜山大会で獲得した7個の金メダルは今回、4個に減少した。

これは柔道だけの問題ではない。本大会において、日本には計80回の金メダルを獲得する機会（13日までの結果）があったが、そのうち勝利を収めたのは37回（46%）である。一方、中国は計169回の金メダル獲得機会を得、うち105回（62%）の勝利を手中にしている。当たり前のことではあるが、最後の戦いに勝たなければ金メダルを手にはすることができない。また、この戦いはアジアの頂点を決するものであり、少なくともこの山を越えなければ、北京に繋がる道はない。

結果として中国は、獲得した総メダルのうち半数を金メダルで占め、2008年に向けたシミュレーションとしての大会の幕を閉じた。

報告：阿部篤志（スポーツ情報研究部）

データ提供：東京Jプロジェクト2006ドーハ、トピアス・バイネルト（スポーツ情報研究部）



カタール・ドーハで開催された第15回アジア競技大会は、1年半後に開催される北京オリンピックに向けて我々がベンチマーク対象とする最後の国際総合競技大会であり、来るオリンピックと同じアジア圏で開催される大会であることから、JOC（日本オリンピック委員会）は本大会を「北京大会へのシミュレーション大会」と位置づけて戦いに臨んだ。

近年、アジア地域における国際競技力向上への取り組みは、世界の潮流と同様に活発化している。特に中東アジアは潤沢な資金によるナショナルトレーニングセンターの整備やスポーツアカデミーでの競技者育成、外国人コーチや帰化選手の獲得等、今後脅威となる可能性を秘めた活動を積極的に展開している。

そのような状況のなか、アジア諸国は本大会をどのように位置づけて戦ったのか。まずは、その背景として、最近のアジア競技大会における各国の戦いぶりを振り返る。

圧倒的な強さを誇る中国、激化するアジア諸国間の戦い

中国は自国開催であった1990年北京大会以降、アジアでは圧倒的な強さを誇っている。1994年広島大会では、金メダル獲得率を40%にまで下げた（前大会比20%減）ものの、その後また少しずつ獲得率を上昇させつつある。2002年釜山大会までは、1位と2位の金メダル獲得率の差は縮まりつつあったが、本大会においてはその差が一気に開いた。逆に2位から5位の差が小さくなっていることから考えると、6位以下のアジア諸国も含めたアジアでの戦いが厳しい様相を呈する中で、中国は安定した結果を残しているという、現

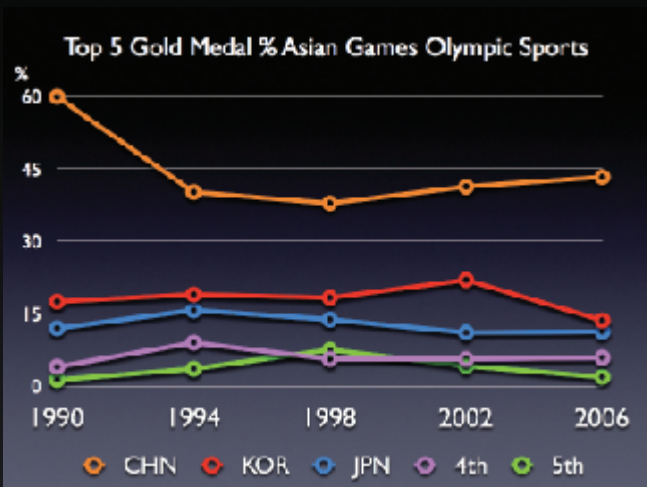


Fig.1

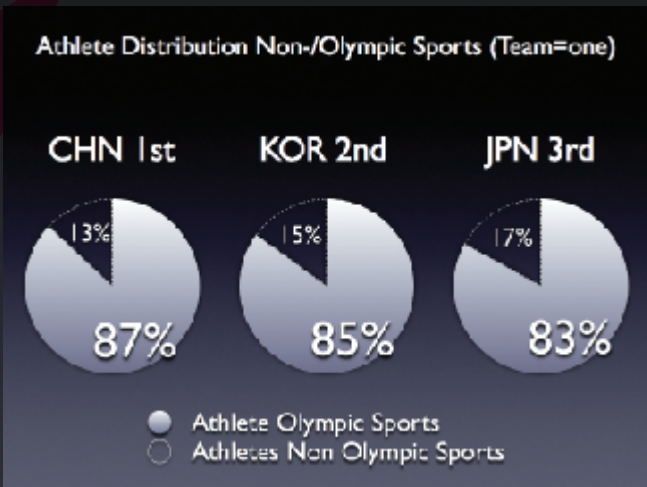


Fig.2

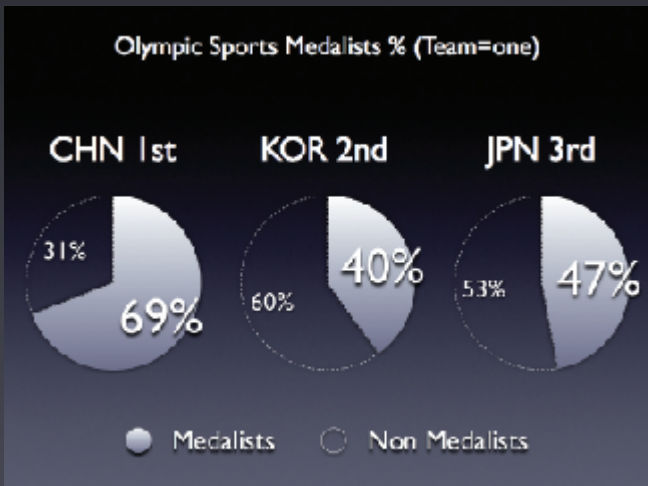


Fig.4

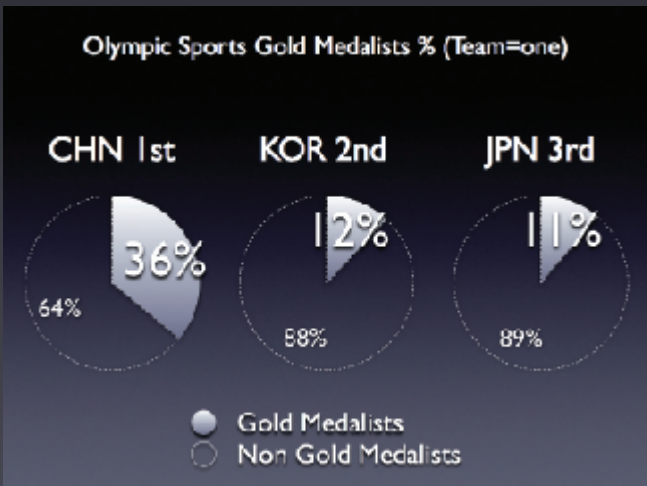


Fig.3



【特集】第15回アジア競技大会ドーハ2006を振り返る

続く。ここからも、中国が圧倒的な数の金メダリストを輩出しているということもさることながら、大変高い金メダル獲得効率を成し遂げていることが分かる。

金メダル獲得効率は、出場選手（※チームは1とカウント）における金メダリストの割合で見ることが出来る。何人の選手で一つの金メダルを獲得したのかということであり、金メダルの獲得を選手団の最大の成果と位置づけられ、それは選手団の費用対効果を如実に表していると言える。中国の金メダル獲得効率は、28人／メダルであり、3人に一人は金メダルを獲得している計算である。韓国は8.3人、日本は9.1人であるところからも、中国の効率の良さは際立っている。

これは総メダル数でも同様であり、中国は出場選手の69%がメダリストである（Fig.4）。韓国が40%、日本が47%であることから見ても、少数精鋭ならぬ「多数精鋭」のチーム編成が行われていると言える。

北京大会に向けた中国の競技力向上戦略

12月15日、戦いを終えた中国選手団は総括記者会見に臨んだ。劉鵬団長（中国オリンピック委員会主席）は今回の結果について、「世界レベルに達しているものは少ない。この成績は北京五輪に直結しない。中国のレベルは停滞し、下がってさえない」「ドーハ15日時事」と厳しい評価を下した。

本大会において中国が国際総合競技大会に初めて参加する400人以上（選手総数の約6割）も

の新星を派遣したところからも分かる通り、中国選手団は北京オリンピックに向けて、多くの有望選手に経験を積ませるという明確な「編成戦略」を打ち出した。中国選手団の平均年齢（23・83歳）と日本選手団のそれ（25・88歳）の間には2歳近い差が見られた。そのようななか、前回大会を上回る好成績を残し、それでも兜の緒をしめるコメントを発するところに、2008年に向けた中国の明確な戦略的リーダーシップが感じられる。

アジアTOP3において、際立っている中国のもう一つの戦略は「女子選手の積極的活用」である。ドーハアジア大会のオリンピック実施競技において、男子が獲得できる金メダルの数は197（全体の54%）であり、同様に女子は153（同・42%）である。この条件において中国は、女子選手が中国全体の6割の金メダルを獲得している。韓国は29%、日本は36%であり、これらと比較しても圧倒的な差で中国は女子選手が活躍していることが分かる（Fig.5）。国際競技力向上におけるフォーカス&ディープ（選択と集中）の戦略オプションとして女子種目の育成・強化に着目することは、もはや目新しい視点ではない。世界には女子競技者に特化したタレント発掘・育成プログラムを通じてトップアスリートを輩出している事例もある。しかしながら、選手団としてこれだけの成果を出せるのは、北京大会に向けたアジア大会の位置づけと方策が戦略的に明確化され、さらにそれをブレずに遂行する「実行力」があつてこそのことであり、そこに中国の強さの要因をみることができる。

TIPS

国際競技力向上への戦略的合意＝BOAとAOC



BOA



AOC

中国のケースのように、オリンピック競技大会に向けた選手団としての競技力向上のステップに、アジア競技大会をはじめとするオリンピック以外の国際総合競技大会を戦略的に位置づける動きは、世界でも起こっている。

BOA（英国オリンピック協会）とAOC（オーストラリア・オリンピック委員会）は2007年1月、組織間連携を拡大する合意を交わした。この合意に伴う具体的行動として、AOCは英国の若手選手に対して、オーストラリアン・ユース・オリンピック・フェスティバル（AYOF）の出場機会を提供することを発表した。この発表では、2007年大会だけではなく、2009年、2011年の大会にも招待する予定であることも明らかにしている。これによりBOAは、ロンドン大会に向けた計画的な競技力向上施策の一環として、英国の新星に対して国際総合競技大会の経験を与えることが出来るようになる。なおこの支援に対してBOAは、AOCがロンドンオリンピック時に行う事前キャンプにおいて、最適な競技場や宿泊施設を確保することを支援する約束を交わした。双方にとって有益かつ極めて現実的な合意の事例である。